

聖書：マタイ 1：1～17

説教題：恵み深い王

日時：2013年12月22日

よく言われることですが、新約聖書を初めて手にして、そこにはどんなことが書いてあるだろうかと期待をもって第1ページを開いたところ、いきなりカタカナの名前の羅列で面食らってしまう。その時点で、聖書は何と分かりにくい遠い世界の書物なのかという印象を持ってしまう。そういう始まり方が新約聖書の第一巻、マタイの福音書の書き出しです。今日の私たちにとって、これは何と退屈な始まり方か！と思いますが、この福音書が宛てられたユダヤ人にとってはそうではありませんでした。系図は彼らにとって大切です。旧約聖書をパラパラッとめくってみれば、あちらこちらに系図が出てきます。つまり、今日の私たちにはそうでなくても、彼らにとってこれほど適切な始まり方はなかった、これは彼らが最も引き付けられ、読みたくさせられる書き出しであったということになります。

そしてここに系図が記されていることは、マタイの執筆目的にかなっています。彼はユダヤ人に対して、イエス・キリストこそ、旧約から約束され、待ち望まれてきた王であることを示そうとしています。そのためには証拠が必要です。イエスはイスラエル王家の出身であることを示さなければなりません。マタイはその「証明書」を先に持ってきているのです。1節：「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。」

アブラハムはご存知の通り、ヘブル民族の祖です。神は創世記12章でアブラハムに言われました。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」神はここでアブラハムを大いなる国民とすると言われました。そしてあなたから出るやがての一人の子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになると言われました。

この約束は、ダビデ王において新しい発展を見ます。2サムエル7章12～13節：「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」ここには、ダビデから出る世継ぎの子が王国を確立し、とこしえに治めると言われています。しかし、その世継ぎの子とはダビデの直接の子どもソロモンではありませんでした。ソロモンは確かに富み、栄えましたが、その王国は分裂し、イスラエルは捕囚の憂き目にあってしまいます。そんな中でも預言者たちは、ダビデに約束されたまことの王が現われて、その国を堅く建てる日の来ることを語り続けました。今日、招詞でお読み頂いたイザヤ書の言葉もそうです。またエゼキエル書37章にも「わたしのしもべダビデが彼らの王となり、彼ら全体のただ一人の牧者となる。」と語られています。このようにして、長いイスラエルの歴史の中で繰り返し預言され、待ち望まれてきたまことのダビデの子が、このキリストだ！とマタイは言っているのです。その主張を裏付ける証明書としての系図を、彼は2～17節に書き記しているのです。

ちなみに、このマタイの系図は旧約聖書の系図と違っている点があります。それは旧約の場合、「子孫」が書き記されるのに対し、マタイでは「先祖」が書き記されていることです。旧

約聖書は、アダムにせよ、ノアにせよ、イサクにせよ、その人物を起点として、そこからどんな子孫が生まれたかを記していますが、キリストの系図ではキリストが最終地点に置かれていて、その「先祖たち」は誰であったかが記されています。これは大切な違いです。旧約の人たちはみな、主の約束はどのように実現するのか、その子孫の歴史を重大な関心を持って見つめ続けました。しかし今や、ついに約束の王が現われました。ですから、もうこの後の系図を書き記す必要はありません。むしろ、アブラハムの子孫、ダビデの子孫をたどって、ついにこの方に行き着いた！ということを示せば良いのです。待ち望んだお方はついに現われた！というメッセージをマタイはここに記しているのです。

さて、私たちはこうして、イエス・キリストが確かにダビデの王家に誕生したまことの王であることをこの系図によって知ります。しかし同時に、この系図はそれ以上のことも語っています。すなわちここには、神の恵みの美しい軌跡・足跡がたどられていることです。この歴史を経て与えられたイエス・キリストは、恵み深い神によって遣わされた、恵みの王であられるということです。

2節以下の系図を見ますと、一見単調に見える記録の中に、不規則な表現が何度か出て来ます。たいていは、「○○に○○が生まれ、○○に○○が生まれ」と繰り返される中で、ところどころ、「○○に、○○によって、○○が生まれ」と合計四人の女性たちの名前が特筆されています。女性が系図の中に記されるのは珍しいことではありません。しかしその場合は、アブラハムの妻サラや、イサクの妻リベカなど、栄誉ある女性たちが取り上げられるのが普通です。ところがここにその名が記されている4人は、なぜその名前をあえて書き記したのだろうかと思われるような人たちです。

まず3節のタマルはユダの妻ではありませんでした。彼女はユダの長男エルの嫁です。詳しくは創世記38章に記されていますが、ユダは遊女に扮した嫁タマルと性的な関係を持ってしまいます。そこに生まれたのがパレスとザラでした。旧約聖書に精通しているユダヤ人なら、この恥ずべき事件をすぐ思い出したでしょう。なぜそのことをここに書くだろうか、と思われるようなことがここにはっきり書いてあるのです。

5節に出て来るラハブはヨシュア記に登場するエリコの町の女性で、イスラエルの二人の斥候をかくまった人です。この彼女は遊女であったとヨシュア記は記しています。確かに彼女はエリコ攻略において大きな役割を果たしました。しかしあの異邦人の町から助け出された唯一の家族、カナン人の遊女を通して、イスラエルに約束されたまことの王の血が流れていったとは一体どういう神のお導きでしょうか。

同じく5節に出て来るルツは、他の3人と違って、とても貞淑な女性です。よく教会の若い婦人のグループ名として、ルツ会という名が付けられることがあります。ちなみに他の3人の名前はあまりグループ名に付けられたという話は聞いたことがありません。タマル会とか、ラハブ会とか、バテシェバ会などは、さすがに付けにくいのでしょうか。しかしルツで思い起こすことは、彼女がモアブ人であったことです。申命記23章には、アモン人とモアブ人はその10代目の子孫さえ、主の集会に加わってはならないとされています。そしてモアブ人の先祖をたどると、創世記19章に行き着きます。そこではロトの二人の娘たちが子をもうけようとして、父ロトに酒を飲ませて関係を持ちます。その結果、姉からモアブ人、妹からアモン人が生まれます。このような暗い過去がモアブ人という言葉にはついて回ります。ところがそのモアブ人が、救い主の家系の母親として召されたのです。

4 人目は 6 節のウリヤの妻バテシェバです。ここでは彼女の名前ではなく、「ウリヤの妻」と記されています。すなわちバテシェバは単なる一人の女性ではなく、「ウリヤの妻」という立場にある女性でした。ダビデは、その他人の妻を奪い取り、彼女との間に子をもうけ、さらにその夫を戦争の最前線に送り出して戦死させました。これはこの系図がダビデのまことの子を示そうとするものであることを考えると重大なことです。ダビデからすれば、頼むからそれだけは書かないでくれー！と言いたいようなことです。しかし驚くべきことは、そんな彼女から生まれたソロモンを通して、救い主の系図は進んで行ったというのです。

もちろんこれらのことは、だから私たちがどう歩んでも大した違いはないということではありません。これらの人々はとても苦しい経験をしました。できるなら、それをする前の時点に戻りたいと願うような、深い嘆き悲しみに打ちのめされました。ところが恵み深い神はこのような彼らを捨てずに、ご自身の約束の実現に向かって導き続けて下さったのです。このことは神が罪に悩む私たちを深くあわれんでくださり、約束の王によって救ってくださるということを意味しています。

同様なことを示す、この系図のもう一つの特徴にも目を留めたいと思います。それは最後の 17 節に述べられていますように、系図全体が 3 つの時代に 14 人ずつ分けられていることです。3 つに分けられているのは、整理がしやすいからということもあるでしょう。アブラハムからダビデ、ダビデからバビロン移住、そしてバビロン移住後、とイスラエルの歴史を大局的につかむことができます。しかしそれらを 14 代ずつにしたことには何か意味があるのでしょうか。聖書を調べれば分かりますが、この系図には省略されている人たちがいます。たとえば 8 節のヨラムとウジヤの間には、アハジヤ、ヨアシ、アマジヤがいました。11 節のヨシヤとエコニヤの間にも、エホヤキムがいました。私たちでも旧約聖書を調べればすぐ分かるのですから、マタイが何かをごまかそうとしたはずはありません。むしろマタイは 14 代ずつにそろえたことに象徴的な意味を込めたと見るのが自然です。二つの見方があります。

一つは、ここにはゲマトリア法と呼ばれる計算方法が適用されているという見方です。このゲマトリア法とは、アルファベット順に数字をつけ、日本語で言えば、あを 1、いを 2、うを 3 として計算するものです。その場合、ヘブル語のダビデという言葉の最初の「ダ」と最後の「デ」はヘブル語で 4 番目、真中の「ビ」は 6 番目なので、 $4+6+4=14$ となります。ですから 14 代ずつ繰り返される書き方は、暗号のようにしてダビデ、ダビデ、ダビデと語っており、この系図に記されているイエス・キリストこそまことのダビデの子であるというメッセージを伝えていることとなります。もう一つの見方は、14 は 7×2 であり、7 は聖書における完全数で、その 7 を 2 倍した 14 は「さらなる完成」「全き成就」を意味するというものです。

学者の間でも意見は一致していませんので、どちらだとは言えませんが、どちらであっても同じようなメッセージがここから出てくるのではないのでしょうか。この 3 つの時代それだけを見るなら、これは素晴らしい歴史ではありません。アブラハムからダビデに至る時代は約束が着々と進行し、ついにダビデ王で頂点に達したというある意味では上向きの期間です。しかしダビデ以降の第 2 期は王国が建設されたのもつかの間、その子ソロモンにおいてイスラエルは南北に分裂し、以後の歴代の王は神にそむいて衰退の一途をたどり、バビロン捕囚に至ります。そしてバビロン移住後の第 3 期は、見る影もない暗い時代。ダビデ王家の存在さえ、どこへ行ってしまったのか。底辺をはいつくばって、もはやどこにも望みなしという状態。ユダヤ人はこのような系図を見てどう思ったのでしょうか。かつての栄光は消え去り、もはや夢も希望も将

来もない、完全に地に落ちてしまった暗い過去の歴史を見るだけだったのではないのでしょうか。しかしマタイはこうして 14 代ずつにまとめて記すことにより、これら一つ一つの時代にも、ダビデの子孫としてのまことの王が与えられるという神の約束は生きていた！と示しているのです。あるいは全き完成、完全な成就に向かつての神のご計画はこの暗い歴史にあっても、確かに進行してきた！と示しているのです。しかもその 14 という数字が 3 つ重ねられています。3 という数字も聖書では完全数です。つまり 14×3 という図式によって、ただその名前を振り返っただけでは暗いものとしか見えない系図が、全く違った様相を呈するようになるのです。そこにいる一人一人は罪深い者たちですが、神は生きて働いて来られたのです。そして、今や時満ちて、望みも救いもない者たちに、その一人によって祝福すると言われた約束の子孫、約束の王を遣わして下さったと言っているのではないのでしょうか。

王様は支配する人です。「支配」という言葉で私たちが普通思い浮かべるのは、上に立つ人が自分に都合の良いようにその権威を用いることかもしれません。しかしこのクリスマスの時に私たちのところに来てくださった約束の王は、仕えられるためではなく、仕えるために来てくださった王です。罪の呪いの下にある国民を救い出すために、王様ご自身が身代わりにご自身の尊い命を投げ出してくださるために来られた。果たしてこんな王様が、世界の一体どこにいるのでしょうか。

そしてこの福音書が記して行くのは、この王は私たちを救い出すための犠牲を最後まで払い切って、ついには死よりよみがえり、父なる神の右の座に上げられて、そこからまことの王としての力を発揮しておられるということです。王の到来をもって始まったこの福音書は、最後 28 章で「わたしには天においても、地においても、一切の権威が与えられています。」というまことの王の力強い宣言をもって結ばれています。ですから今日の御言葉は、かつての古い時代にだけ属する話ではないのです。イエス様は今や、罪に悩むどんな人をもご自身が望むままにあわれみ、祝福の支配に生かす権威を持っておられます。この恵みの支配に生きるようにとすべての人を招いておられるのです。

私たちを見る限り、希望はありません。この系図に見るうめきや悲しみは、今日の私たちの現実そのものです。しかしこの系図に示されていることは、クリスマスに誕生した王は恵み深い王だということです。すべての罪人に希望を与え、救いを与える王だということです。イエス様は言われました。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは…罪人を招くために来たのです。」私たちはこの恵み深い王を感謝して受け入れ、この方の前に額づきたいと思います。そして私たちのあらゆる罪と苦しみに打ち勝つ恵みの支配に引き上げられて、まことのいのちと永遠の祝福に生かされる主の民の幸いに導かれたいと思います。